

消えない怒りを原点に

神戸大学 人間発達環境学研究科 修士1年

後藤聡美

鳴り止まないクラクション、暑さにへばる犬、鼻をつくスパイスの匂い、肌にとわりつくようなじっとりとした空気。4年前の夏、大学1年生の私は、インド最大の商業都市ムンバイにいた。特にインドが好きだったわけではない。国際協力にも興味はなかった。「大学生になったら海外に行きたい。」ただそれだけの理由で、たまたま見つけたスタディツアーに参加した。

『スラムに暮らす子ども達と出会う旅』と題されたこのツアーで私が出会ったのは“不可触民”と呼ばれる子ども達だった。表面上は廃止されているはずの“カースト”はインドの長い歴史を経て、未だこの地に残っていた。道路の際にビニールシートやトタンで造られた住居のようなものが隙間なく並び、派手やかな洗濯物がそれを彩る。家の外では赤ん坊をあやす女の子、水浴びをする男性、その周りで遊んでいる子ども達は私たちに気付くと我先にとこちらに走り寄る。ここにはこの日常があった。彼らの笑顔を見ると“触れるだけで穢れる存在”という言葉の意味が理解できなかつた。理解したくもなかつた。彼らは一人ひとりが私たちと同じ人間で、それぞれが〈個〉として尊い存在だということを教えてくれた。スラムで学んだこの人間観は4年経った今でも風化していない。しかし、今思えばこのとき私は、日本での生活で植えつけられてきた、「スラム」に対する「汚い」「怖い」「可哀想」というレッテルをはがすため、スラムの良い部分ばかりを見ようとしていたのかもしれない。何かが引っ掛かっていたが気付かないフリをしていた。漠然とした違和感を抱えたまま、もう少しこのスラムに暮らす人々のことが知りたいと思い、年に1度ムンバイを訪れることにした。

ある年、スラムで人が亡くなった。私がよく知る18歳の少女だった。母親は彼女が小さい頃に亡くなっており、父親はアルコール中毒で時々暴力をふるった。彼女は早くに家を出、この地域ではよく思われていない異宗婚をしていた。結婚後は外出する頻度が極端に減っていた。彼女の死因は炊事場の火元での焼死。明らかに不自然な死であつたにも関わらず、警察はすぐに「自殺」と断定し、それ以上の捜索は行わなかつた。スラム住人は内々で「自殺であるはずがない」と話していたが、警察に異論を唱えた者はなかつた。人が死ぬという事の重大さと不釣り合いな周囲の反応のあつけなさに呆然とした。“カースト”が低いから？“女性”だから？“異宗婚”をしたから？こんなことがあつていいのか。怒り、悲しさ、悔しさで涙が止まらなかつた。私がスラムの子ども達と出会ってから無意識のうちに目を背けようとしていた何か、スラムの暗く深い闇が垣間見えた気がした。

「人の命の重みは同じであるはずなのに、それが違う世界がある。」

ムンバイのスラムで覚えたこの憤りが今の私を動かしている。彼女のように、人生を全うすることなくこの世を去る人はこの世界にどれぐらいいるのだろう。彼女のように、声をかき消されてしまう人はこの世界にどれぐらいいるのだろう。私が怒っているのは、暴力をふるう父親でも、異宗婚をした彼女自身でも、早々に捜索を切り上げた警察でも、警察に異論を唱えなかつたスラム住人でも、ない。このどうしようもなく大きく、理不尽な社会である。世界は変えられない。社会は変えられない。度々痛感する。しかし、スラムに暮らす人々と触れ合う中で気付いたことがある。私は社会に直接影響を与えることはできないが、目の前にいる人間には影響を与えることができる。私は彼らを笑顔にすることができるし、彼らから多くのことを学んでいる。人間は人間と触れ合うことで学び、変化することができるのだ。スラムで見つけたこの小さな可能性と忘れることのない怒りを原点に、かき消される声に近づき、耳を澄ませたい。そして、彼らと相互に影響を与え合いながら、この社会を生きていきたい。(1595字)